
負物語

朝谷 紘人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負物語

【Nコード】

N7592Z

【作者名】

朝谷 紘人

【あらすじ】

“努力を知らない勝者なんか敗者より負けてるじゃないか”

混沌よりも這い寄る過負荷、球磨川禊。

彼に勝利の味を教えた、

絶対的な勝利を手にする怪異とは！？

世界が変わったとき、＜物語＞は交錯する――

これぞ現代の怪異！怪異！怪異！

青春は勝っても負けても君のもの。

みそぎスパイダー001

僕みたいな出来損ないが物語の語り部を務めるのは、僕なんかよりよっぽど主役を務めるにふさわしい勝ち組達から批判の声が飛んできそうなものである。

まあ巷じゃ僕みたいに嘘つきで弱々しい戯言遣いがシリーズ通して主役を務めたり僕みたいに主人公と敵対する悪役の詐欺師がメインヒロインを押し退けて語り部に成り上がったとかいうこともあるらしいからこういう場があってもいいよね。

そう、この僕こと球磨川禊は少年漫画原作の物語の主役を務められるほど強くないし、正しくもない。

僕には事実を無かったことには出来ても虚実をあったことには出来ない。

相手を弱くすることは出来ても相手より強くなることは出来ない。番外編の主人公にはなることはできても本編の主人公になることは出来ない。

僕には相手を打ち負かすことは出来ても勝つことは出来ない、勝つたことがない。

生まれた頃から僕はあらゆる勝負に負け続け、その度に勝ちたいという思いは強くなった。

勝つための努力は山ほどした。男の子たるもの一度は悪を挫くカッコいいヒーローに憧れるものだ。当然僕にもそのような時期はあった。

少年漫画の主人公のような、かっこよく、正しいヒーローになりたかったのだ。

でもどれだけ努力したところで僕は僕、負け組は負け組であり勝利を手にすることはどうやっても出来なかった。

そんなことはとっくの昔に分かっていたことじゃないか。

僕は勝者にはなれない。

そんなことは13年前、初めてあの絶対的な勝者に会った日から分かっていた。

だから僕はあらゆる勝者を潰してきた。

幸せそうにしている連中の笑顔を片っ端から潰してきたのだ。

何食わぬ顔で、格好つけて、括弧つけて。

そんな僕を止めたのもやっぱりめだかちゃん——絶対的な勝者だった。

彼女みたいに正しい人間だったら僕も本編で主人公になれたのかな？
多分なれなかっただろう。

さあ、これはそんな僕が体験した本編でも番外編でもない、僕自身の物語。

勝者に一杯食わせる負け組の独り語り。

みそぎスパイダー002

その日、僕たちは普段のように学園内で繰り広げられる激闘の非日常：ではなく、むしろめだかちゃん率いる僕たち生徒会にとっては非日常よりも珍しい、いたって普通の日常的な時間を過ごし、いたって普通に放課後を迎えた。

僕はさっさと帰り支度をすませ、そのまま生徒会室へと向かった。

こんな僕でもこの箱庭学園の生徒会副会長である。

僕みたいなのが生徒会副会長なんかやってるなんて国を守る気がない人間が政治家をやっているような滑稽さがあるが、しかし僕が副会長という大役を務めているのにもちゃんとした理由がある。

それはクラスの皆からの熱い思いのこもった組織票により無理矢理選ばれたとかじゃんけんに負けて渋々立候補したからとかではなく、生徒会長黒神めだかに直々に指命を受けたからである。

僕は生徒会戦拳の末、めだかちゃんに敗北した。本来ならそこでの学園を去るつもりだった僕をあの娘は生徒会、それも副会長に任命したのであった。

まったく、つくづくおかしな娘だよね。

そういったいきさつがあって副会長になったわけだが、今となっては生徒会役員のみならずとも仲良くやっていってるつもりだ。

庶務の人吉善吉こと善吉ちゃんはめだかちゃんの幼なじみだ。

本人はめだかちゃんを守る気で見たいだけだけどなんといっても彼は良くも悪くも“普通”、はたから見れば彼みたいな子がめだかち

やんみたいなの怪物を守る意味も意義もない。

だけど彼じゃなければめだかちゃんとは並び立つことは出来ない、彼には普通ながらそう思わせるような素質があると安心院さんは踏んでいるみたいだ。

そして書記の高貴ちゃん――阿久根高貴は中学時代、破壊臣としてその名を轟かせていた。当時生徒会長であった僕（この辺りについては完全なイカサマなのであまり言及しないで欲しいな）の下で生徒会庶務として働く一方、破壊活動に勤しんでいた。そんな彼もやはりめだかちゃんに出会い、彼女に恋をしたことで変わった。その後柔道部に入り鍋島猫美の指導を受けたことで破壊臣の面影はなくなってしまった。

そして最後に会計の――

「うーん……もうちょっとで届くんだけだなあ……」

会計の喜界島さんが教室から生徒会室の間にある廊下の自販機の底に手を突っ込んで手探りで何かを探していた。

喜界島もがな――水泳部から生徒会に1日320円で雇われているお金にうるさい少女。

金さえ払えばどんなに危険で、過酷で、下衆な仕事でも引き受けそうなものだ。

『やあ、どうしたの？喜界島さん。』

「あ、みそぎちゃん！ええと……実は自販機の下にお金を落としたりやったの……それより今何か凄く失礼な紹介された気がするんだけど……」

……気付かれていたらしい。

いくら過^{マイナス}負荷の僕とはいえ、ここで反省しないわけではない。
どれここは男らしく、120円までなら奢ってやろう。

『とりあえず、いくら落としたの』

「10円」

……安っ！

そんな額のために女の子が地べたに這いつくばって埃まみれになりながら自販機の底に手をつっ込んでいたかと思うと泣けてくるぜ。
さすがの僕でもそこまではしない。

僕が“混沌よりも這い寄る過^{マイナス}負荷”ならばさしずめこの娘は“10円求め這いつくばる会計”といったところだろう。
気が変わった。150円までなら奢ってやろう。

「ねえ……みそぎちゃん、さっきから私のことバカにしていな？」

『ん？ああゴメンゴメン、喜界島さんの裸エプロン姿を想像してたんだ』

「どっちにしてもあんまり嬉しくはないね……」

『良いものを見れた気分になったよ。お礼にジュースを奢ってあげる。』

当然それは建前であり、本当は地べたに這いつくばる彼女が可哀想だったからだ。

僕は可哀想な娘が大好きなんだ。

「本当に！いいの？みそぎちゃん？やったー！」

この娘、ジュース一本でいくらなんでも喜び過ぎである。

ここまで喜ばれるとあまのじゃくな僕としては、逆に奢りたくなくなってくる。

『ああ、構わないよ。』

まあ、そうひねくれていても仕方ないので、僕は自販機に300円、僕と喜界島さんでそれぞれ150円ずつ、投入口に入れてボタンを2つ押した。

選んだのはコーラを2つ、のはずだったが……

「…コーヒー？」

1つ目にはコーラが出てきたのだが、2つ目に出てきたのは喜界島さんの言う通り、砂糖不使用のブラックコーヒーだった。

僕は確かにコーラのボタンを二回押したはずなのでコーヒーが出てきたのは自販機の故障か何かだろう。

『喜界島さん、コーヒーは好き？』

「あんまり好きじゃないかな……」

『じゃあコーヒーは僕が飲むよ。僕はこう見えて3度の飯よりコーヒーが好きなんだぜ。』

「でもみそぎちゃん、コーラ選んだよね？ひよっとしてコーラが好きなんじゃないの？」

バレてしまった。

実は僕は3度の飯も食べられなくなるほどに苦いものが嫌いだ。
ましてや砂糖の入っていないコーヒーなんて飲めるはずもない。
このコーヒーも生徒会室に持って行って砂糖をたっぷり入れて飲む
つもりだった。

僕がその旨を伝えようと喋り出す前に喜界島さんは

「あ、そうだ！」

と何かを閃いたようだ。

「じゃんけんで決めようよ！」

じゃんけんか。

名案のつもりなんだろうが何を隠そうこの僕、球磨川禊は勝ったこと
がない。

それはじゃんけんも例外ではなく、ものの見事に勝率は0である。

「いくよー！じゃん、けん、」

そんな目に見えている勝負なんてする意味がないだろうというのが
実際のところだが、そのようなことを彼女に言ったところで仕方が
ない。

ここは……グーだ。

「ポンッ！」

そこで彼女がパーを出して僕の負け……そのはずだったが彼女がそ
の時出した手はチョキの形を示していた。

「あーあ、負けちゃった……じゃあこのコーヒーいただくね。禊ち

やんがせっかく奢ってくれたんだからたまにはブラックコーヒーも
いいかも」

なんていい娘なんだろう。

惚れちゃうじゃないか。

それに彼女、僕と違ってブラックコーヒー飲めるんだな……

いや、驚くべきところはそこではなく、今僕は確かに勝った。

じゃんけんとはいえ、人生で初めて勝利というものを手にした。

今まで負け続けてきた僕が、ここにきて初めて、勝利の味を知った
のだ。

これは一体どういうことだろう……

このときの僕にはここでの初勝利がどういった意味を持つのか知る
よしもなかった。

みそぎスパイダー003

ジュースを買い終えた僕たちはそのまま一緒に生徒会室に向かおうとしていた。

さっきのじゃんけんはきつと偶然だろう。

いくら勝ったことのない僕とはいえ、じゃんけんの勝敗を左右するのは実力も何も関係ない時の運、全ては神頼みだ。

きつと神様も疲れていたのだろう。

もしも自分の間違いを正しに僕のもとへ現れるようなことがあるならばブラックコーヒーでも奢ってやろう。

「ねえ、みそぎちゃん？」

『ん？なんだい？』

喜界島さんから突然声をかけられ、ハツとする。

「どうしたの？何か深刻な顔してたみたいけど。」

『いや、たいしたことじゃないよ。どうやったら喜界島さんの制服を裸エプロンでできるか考えていたんだ』

「結構たいしたことだね…」

『いくら払ったらしてくれる？』

「結局お金なの！？ていうかしらないよ！」

『1000円でどうだい?』

「私そんなに安い女じゃないもん!」

『10000円』

「……しないもん。」

『数行悩んだね。』

素直じゃないなあ。

僕みたいにもっと自分に素直に生きればいいのに。

本当は裸エプロンもやりたいんじゃないかな?

喜界島さんって意外と卑猥な娘だったりして。

「ねえ、みそぎちゃん。」

『なんだい、卑猥島さん。間違えた喜界島さん。』

「さらっとんでもない間違いしないでよ!それより、あれ見てよ。」

喜界島さんの指差す方向を見ると、教室の中に男子生徒が4人、机に向かい合ってなにやらカードゲームをしているようだ。

『見たところあれはランプみたいだね。でも喜界島さん、この学校ではランプ等カード類の持ち込みは禁止されていないじゃないか。それなのにランプなんか指さして、どうしたんだい。』

「違うの、みそぎちゃん。ほら、あの人たちお金を取引してる。」

そう言われて見てみると彼らがランプゲームをしている傍らには数枚の札束と小銭が置かれていた。

『なるほど、喜界島さんあれを狙ってるんだ。』

「うん、あれだけあれば何日分の生活費に：ってそうじゃなくて、高校生があんな大金学校に持って来られるなんて不自然だと思わない？ ほら、この間目安箱に何件もお金がなくなったって投書があったでしょ。」

『ああそういえば。』

2週間ほど前からだっただろうか。

授業や部活動が終了した後、気が付いたらお金がなくなっているという投書が目安箱に殺到したのだ。

その金額の合計は確か9万円ぐらい。

当選僕たちも犯人探しのために従事しようとしたのだが、お金の問題となると僕たちだけでの解決は難しいと考えられたため、この問題は先生たちにまかせっきりになっていたのだ。

なにも報告がなかったためにつきり解決されたと思っていたんだけど……

『なるほど。彼らの仕業っていうせんもありえるね。』

「でしょ。でも証拠がないからなんて話しかけていいか分からなくて……」

証拠、か……

『よし、喜界島さん、僕に任せてよ。』

そう言って4人組に話しかけに行く。

『やあ!』

「あん? 誰だてめえ?」

おお、予想以上に少年漫画の不良生徒にありがちな反応だ。

『はじめまして、僕は球磨川禊。ちょっと無くなったお金を探していてね。君たち随分お金持ちみたいだけど何か知らないかい?』

うん、われながら上出来だ。

「あん? 金だあ? 生憎これは1銭残らず俺らの金でなあ。」

「おい、平川! この球磨川禊ってやつ、あの生徒会長と互角にやり合った副会長だぜ!」

別の男子生徒が説明に入る。

悪者が噂の副会長に恐れをなす……少年漫画らしくていい展開だ。

「ああ、あんたが例の副会長か。だが聞いた話によるとあんた、勝敗のはっきりしてる勝負には勝ったことがないらしいじゃねーか。」

……そこまで噂になっていたのか。全く、噂の副会長はおちおち勝負もできないぜ。

『なるほど、よく知ってるじゃないかい。だけど君、僕が勝負に勝ったことがないってのは大間違いだぜ。さっきもそこにいる喜界島さんとじゃんけんして、見事一発勝利したところさ。』

4人の視線が喜界島さんに集中する。「え？あ、うん、それは確かに本当だよ。」

すると平川という生徒がまた口を開く。

「はん！じゃんけんに勝ったぐらいで何を意気がってやがる。」

『いや、じゃんけんだけじゃない。僕は君たちとのトランプゲームにも勝利して、目安箱に投書されていただけの金額を取り返してみせる。』

「面白いじゃねーか。だがこっちは10万近くの大金を掛けるってのにタダで賭けに参加しようってわけじゃねーよな。」

『もちろん、僕も大金を手に入れるためには大きな代償が必要だと思ってるよ。』

「ちょっとみそぎちゃん！いくら投書のためとはいえ、みそぎちゃんがそこまでの犠牲を負う必要はないんじゃないの？」

喜界島さんが止めに入る。

『いや、いいんだ。僕は生徒のために犠牲になるのが生徒会役員として当然だと思っているからね。』

「そんな、でも……」

『というわけで僕が負けたあかつきにはこの喜界島さんを差し出そう。』

「この人何も犠牲にしてなかった！」

『いやいや、僕は誰よりも大切な喜界島さんを犠牲にするんだ。あー悲しいなあ。』

喜界島さんも一応生徒会役員だしね。

「その嬢ちゃんを好きにしていってか……いいだろう。」

「よくないよ！」

喜界島さんの反対もむなしく、交渉は成立。賭けがはじまることになった。

あーなんて可哀想なんだ喜界島さん。

僕らのお金と喜界島さんを賭けた勝負として行われる競技は大富豪。地方によっては大貧民ともいう。

各プレイヤーに均等にカードを配り、カードを出しあってその強さ

を競うゲームだ。

カードは3が最弱でそれに続いて4、5と数字が大きくなるにつれて強くなり、そしてキングから上はA、2と続き結果的に数字上では2が最強となる。

ただし大富豪には革命制度というものがあり、同時に4枚のカードを出せば革命が成立し、カードの強さは逆転する。同時に出せるのは同じ数字のカード、もしくは階段といって同じマークのカードの数字が3枚以上連続して順番に並んだ場合だ。

また縛りという制度もあり、二人のプレイヤーが連続して同じマークのカードを出した場合それ以降カードがきられるまでは同じマークのカードしか出せなくなる。

ジョーカーは全てのカードの代わりとして使用することが可能であり、数字上では最強のカードよりも強くなれる。

といったところか

「さらにこの大富豪には普通とは違うルールがある。」

平川君が説明を加える。

「カードには1つ1つ特殊効果を持たせる。

3と2は最弱のときにジョーカーが出された場合ジョーカーに勝つことの出来る唯一のカードとなる。

4が出された場合4がきられるまでその後に出されたカードは効果を失う。

5が出されたら出したやつの次の番のやつは順番をとばされる。

6が出されたときは順番を逆回りにする。

7を出したやつは次のやつに7を出した枚数だけカードを渡せる。

8を出したらそこまでのカードは全てきられる。

9を出したら9の数だけ次のやつとカードを交換できる。

10を出したら10の数だけカードを棄てられる。

Jを出したらJがきられるまでカードの強さが逆転する。

Qを出したやつはQの数だけ棄て札からカードを拾うことができる。

Kが出されたら全員のカードを回収してシャッフルし、もともと持っていた枚数に配りなおす。

これら全ての効果はAが出された場合打ち消される。

ジョーカーについては普段のルールと同じだ。

勝負は5本、あんたが先に3勝したら賞金はあるんだ。

俺らのうち誰かが先に3勝したら約束通りその嬢ちゃんが好きにさせてもらうぜ。

そっちから持ちかけた勝負なんだからそのくらいのハンデは構わないだろう？

「

『長たらしい説明わざわざご苦労様。こんな面倒くさいこととしてまで勝負に勝ちたいみたいだけど残念ながら君たちはここで僕に負けるんだ』

「はんっ！やれるもんならやってみやがれ！」

さて、随分でかい口を叩いてしまったもんだが僕が勝ってしまうような間違いが二回も続くはずがない。

ここはゲームをしている隙をみて金を奪い、ゲームが終わった瞬間こいつらを螺伏せて喜界島さんを連れて逃げるのが正しい判断であろう。

だったら始めっからそうしろって？

勝ったのに報われないなんて状況の方がこいつらの悔しがる顔が見れて楽しいじゃない。

『では平川君とその他3名たち。最初で最後の出番なんだから精々いい勝負を見せるといい』

さあ、負け試合の始まりだ。

みそぎスパイダー004

平川君とその他3名にはもの凄く申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまいう展開なのだが、この勝負、僕が先に2勝してストレート勝ちであった。

あれだけの細かい設定も実戦でお見せすることもなく無駄となってしまった。

彼らもここまで圧倒的に負けてしまつては、潔く負けを認めざるを得なかったらしく約束通りの金額を差し出しこの件については無事解決という形で事なきを得た。

「でもみそぎちゃん、どうしてあの人たち素直にお金を返してくれたのかな？」

『それは彼らがゲームによって求めていた最も重要な物がお金ではなく勝利だったからさ。勿論お金も欲しかったんだろうけれど心の底で求めていたのはギャンブル特有の、リスクを負えば大きな価値を得られるという、勝ちを得られるというある種の快感だったんだろう。』

喜界島さんからの問いに答える。

「でも、もしあれが本当にあの人たちのお金だったらすすがに勝ち負けとか言ってられなかったんじゃないの？」

『大丈夫、あれは目安箱に投書をした生徒たちのお金だよ。』

さらに説明を加える。

『ゲームが始まる前に彼らは10万近くの大金を賭けると言っていた。

でもその時点で彼らは生徒たちの無くしたお金の総額は知らなかったはずなんだ。』

「あ、そうか…」

だがあくまでそれは結果論であり、本当は予定通りお金を猫ババして喜界島さんとトンズラする予定だった。

まあとりあえずは喜界島さんも納得したところでこの案件は正真正正銘一件落着。

でも本当に、どうして僕が2回も勝負に勝つことが出来たんだろう……

一回目に勝利を収めたじゃんけんは完全な運の勝負、その次の大富豪は運だけではなく、本人の読みや戦略によっても大きく勝敗が変わってくる。

ただし勝負を左右するのは実力と運だけではない。

どんなときも勝利を手にする勝ち組というのは勝つことに慣れている、勝ち方が染み付いているのだ。

その点僕は無能で不幸で敗者だ。

そんな人間が今更勝利を、それも連続で手にしてしまうなんてどうしてしまったのだろうか……

何も無ければいいんだけど……

「何も無いわけがないじゃないか」

僕たちは後ろを振り返った。

僕の心の声に応答を示した人物を確かめるために、いや、そもそも

心の声に応答を示せる人物なんてこの学園には一人しかいない。そもそも彼女は人物には当てはまらない、人外なのだが。

『安心院さん……』

「あじむ安心院なじみ……!? いつからそこにいたの?!」

「おいおい喜界島さん忘れてもらっちゃ困るぜ。

ぼくは《アリバイブロック腑罪証明》でいつでもどこでも存在することができなんだぜ。それとぼくのこととは親しみを込めてあんしんいん安心院さんと呼びなさい。」

驚いた様子の喜界島さんに対して安心院さんはいつも通りの涼しげな表情でそう答える。

『珍しいじゃないか。安心院さんが僕のところに姿を見せるなんて。ここ最近の善吉ちゃんに付きっきりだったのに。』

「なあに、ちょっとおもしろいことが起きているみたいだからね。よりによって球磨川君が勝っちゃうなんてこれほどの大事件はぼくにとってもまだたったの372回目なんだぜ。」

それが僕たちにとって少ない数字だとは到底思えなかったけれど、しかし僕たちとは文字通り桁違いな彼女の感覚ではそれはほんの極稀なことであったのだろう。

『で、安心院さん、これは一体どういうことなんだい? 君なら何か知っているんだらう?』

「ああもちろん、結論から言えば」

安心院さんはそこで一呼吸置く。

笑ったように目尻が動いたような、そうでもないような。

「今の君は最強だ。」

そこにいる喜界島さんやそこいらの不良生徒は勿論のこと、人吉君や阿久根君、そしてめだかちゃんさえ今の君の相手には到底なり得ないんだぜ」

『……詳しく教えてくれないかな』

この僕が勝ったくらいなのだから必ず何かが関わっているとの覚悟はしていたが、まさか自分が最強にまでなっているとは思いもしなかった。

ではその理由はなんだ？

どうして唐突に、突然に、今まで勝つことのできなかった僕が最強にまでなったんだ？

「球磨川君、君が勝てない理由は君がどうしようもなく無能で不幸^{マイナス}で敗者だから……とか言ってたっけ？」

言っではないが確かにそうだろうと、先ほど推測した。

「確かにそれはその通り、君が勝てないのにもそれなりの理由があるんだ。」

ところが今の君は、それらの欠点^{マイナス}が全てなくなり、ひとつ残らず長^{プラス}所へとすりかわっている。

言い換えると、君は今どうしようもなく有能で幸運で勝者なんだぜ。

「

『……どうしてそんなことになっているのかな？』

そうだ、僕の1番知りたかった本題はそれなのだ。

「怪異という人ならざる物の仕業だよ。

どこにでもいるけどどこにもいない。

ぼくとわりと近い存在さ。

だからぼくには彼らのしようにすることが大体分かるんだよ。

といってもぼくにも君にとり憑いている怪異がどういったものか分からない。

僕らは似ているようでちよつと違う存在だからね。

君もポケモンの姿と名前は覚えられるのに人の顔と名前は覚えられないとかいうことがあるだろう」

『生憎僕はデジモン派なんだ』

「そうかい。

でもポケモンとデジモンっていつからあんなに差がついたんだろうね。

ポケモンなんてアニメは初期のバタフリーの話で最終回の予定だったんだぜ。

それが今ではサトシは10年以上も旅を続けている。」

『それにアニメにおいては実はポケモンよりデジモンの方が人気があつたっていう話じゃないか。

最もそれは初期に限った話だけど』

あとポケモンアニメのピカチュウは話が進んでいく過程でアニメのデジモンのように喋るようになる予定だったらしい。

けれど声優さんの鳴き声の演技があまりに素晴らし過ぎて鳴き声のまま旅を続ける話に変更になったらしい。

僕の声優もそのぐらいの演技が出来る人にやってもらいたいね。

『で、話を戻すけど安心院さん。怪異についての詳細と、これから僕がすべきことを教えてくれるかい？』

「だから言つたら球磨川君。

ぼくには君にとり憑いてる怪異についての詳しいことは分からない。君に起きていることはあくまでぼくの371回の経験からの憶測さ。だから怪異に関する問題についてはいつもぼくは人任せなのさ」

そこで安心院さんは空いている左手を懷に差し込んで手探りで何かを探し始めた。

「あつたあつた。球磨川君、そして喜界島さん。

君たちは今から電車でこの場所へ向かうんだ」

そう言って安心院さんが差し出したのは2枚の切符だった。

「そこへ行けば誰か、怪異に詳しい人間に会えるはずさ。」

「わ、私も？」

喜界島さんが驚いたように問い返す。

「ああ、さすがに球磨川君1人では解決には向かえないかもしれないらしいなにより物語としてつまらないだろう？

それに他の生徒会役員は強すぎる。

彼に憑いている怪異はまだ未知数故、迂闊に強者を相手にしてしまつては怪異を強化しかねない」

遠回しに喜界島さんが弱いという安心院さん。

『だけど君の目的はめだかちゃんを倒すことじゃないか。
それならこのまま僕を泳がしてめだかちゃんと対決させた方がいい
んじゃないかい?』

そう、彼女は打倒黒神めだかのために次世代育成プロジェクトを組
んだり善吉ちゃんを主人公にけしかけようとしていたりしている。
だからめだかちゃんを倒すことのできる力を持つ今の僕は、彼女の
計画には絶好の逸材なのではないだろうか。

「おいおい球磨川君、自惚れてもらっちゃ困るぜ。

君は一度黒神めだかにはっきりと負けを認め改心したじゃないか。
君が改心したことで、その時点でもう君が敵として現れるシナリオ
は終わったんだ。

もう君はラスボス候補でも何でもない、ただの登場人物の1人なん
だよ。

だから今さら君がそんな偶然遭遇した得たいの知れないもののせいで
強くなったところで、物語としては何も動かないのさ」

安心院さんははっきりとそう言う。

だから怪異に詳しい人間に会ってこいと……

怪異に詳しい人間。それだけ聞くとなんだか怪しい印象を受けてし
まうが、大丈夫だろうか?

それに偉くアバウトな説明だが本当にそのような人間がいるのだろ
うか。

『そもそも安心院さんにもよく分からない存在や場所があるんだね。

』

「いやいや、ぼくだってさすがに別の物語の世界には干渉しづらいんだよ。」

こういったケースは本当に珍しいんだぜ。」

安心院さんの言った「別の物語の世界」という言葉。

これが比喻なのか、はたまた僕たちがこれから向かう場所は本当に僕たちの住んでいる世界とは違う世界なのか、そんなことは僕たちがこれからすべきことにおいては関係のないことだ。

みそぎスパイダー1005

安心院さんにもらった切符を使用して、僕たちはそこに示されている場所へ向けて電車へ乗り込んだ。

『それにしても僕、女の子と電車で二人旅なんて初めてだよ。なんだか僕興奮してきなあ！喜界島さん、電車から降りたらどっか遊びにいかないかい』

「電車から降りたら怪異に詳しい人を探しに行くんでしょ。本来の目的を忘れないでよ、みそぎちゃん」

僕の精一杯のアプローチも見事に受け流されてしまった。

今の僕であっても女の子の心までは勝ちとれないというのか……

「それにみそぎちゃん、遊びに行くと言ってもどこに行くの。

お金を使うところは嫌だよ？

ただでさえ私安心院さんが片道切符を私とみそぎちゃんに一枚ずつしかくれなかったお陰で帰りの電車代は自分で払わないと行けないんだよ？

いくら帰りは目的地が分かっているとはいえ結構な距離だもの、大出費じゃない。

ああもうこうなったら帰りは歩いて……」

『落착きなよ喜界島さん。歩いて帰ったら日が暮れちゃうよ』

やはりお金が絡むとこの娘、何を言い出すか分からない。

『遊びに行くと言っても、ちょっとその辺りを散歩するだけだよ。それに僕たちは安心院さんの言っていた人物について何も知らない

んだから、ある程度聞き込みをしなければならぬじゃないか』

「それならいいけど……でも聞き込みをするにしても何の手掛かりもないのに大丈夫なの？」

喜界島が尋ねた。

『大丈夫だよ、何せ安心院さんの言ったことだ。

彼女が間違いないと思っている限り、それは本当に間違いないと言えるね』

それが正しいことでも間違ったことでも、彼女がそう言うからにはそこに行けば何かがあることは間違いないのだ。

そうこうしているうちに、僕たちを乗せた電車は目的の場所へとたどり着いた。

そこは人気ひとけの少ない無人駅であった。

無人なのに少なからず人の姿があるというのはおかしい話だが、ここでいう無人駅というのは地方などでよく見られる駅員の居ない駅のことだ。

駅から外を見るとどうやら雪が降っているらしい。

今は1月、それも今日はかなり冷え込むので無理もない。

外へ出て歩みを進めようとするが、今日は風が強く普段ならしんと降っているであろう雪も今日に関して言えば吹雪とも言え表せられるだろう。

雪が積もっているおかげで足場が悪いせいもあり、かなり歩き辛い。気を抜けば転んでしまいそうだ。

「きゃっ！」

言ってるそばから喜界島さんが転んでしまった。
起き上がって雪を払う彼女は特に怪我などはしていないようだが雪に彼女の転んだあとがくっきり残ってしまった。
魚拓ならぬ喜界島拓の完成だ。

『喜界島さんなにやってるのさ。遊んでる暇はないんだよ。』

「遊んでないよ！」

それにみそぎちゃんさつき遊びに行こうとか言ってたよね？」

やれやれといった感じで肩をすくめて言う僕に対してすかさず突っ込みを入れる彼女。

ここで突っ込んでくれなかったらどうしようかと思ったよ。

案外僕たちって相性いいのかもしれないなあ。

結婚したら毎日裸エプロンで朝食を作ってもらおう。

なんて妄想を膨らましている僕とそんなこととはつゆ知らず首もとから服の中に入ってしまった雪を落とそうとしている喜界島さん。
お互いその動作をと同時に進行でゆっくりと歩き始めた。
だが数歩分歩みを進めたところで

「おい待て、その女子高生」

と、僕たち、主に喜界島さん呼び止める声が聞こえて後ろを振り返ると、先ほど喜界島さんが転んだ位置——喜界島拓の真上に男性が立っていた。

全身を喪服のような黒服に包み、感情が表情に全く見えない顔、髪はそこまできちんと整えていないようである。

こんな表現を僕がするのもおかしいがあえてその佇まいを一言で表すとすれば“不吉”そのものであった。
その男は喜界島さんに向けて喋りだす。

「そこのお前だ。今財布を落としたぞ。」
そう言って男は彼女の財布を差し出す。

「ああ！」

ありがとうございます！
あなたは命の恩人です！」

喜界島さんがあからさまに喜びを露にする。
いや、さっき確認した限りじゃその財布せいぜい2000円ぐらいしか入ってなかったじゃない。

「いや、礼はいい。

俺こそ良いことが出来て気持ちがいいぞ。それにしても今時の女子高生がこんなに安いがま口財布を使っているとは……財布は金の出入口だ。

出入口が綺麗ならば入って来るものも自然と釣られてくるものだ。
まあ出入口も何も作ってなあ俺には関係のない話だな」

「なるほど……

今度100円ショップにでも探しに行ってみます！

本当にありがとうございます！

やっぱりお金の好きな人に悪い人はいませんね。」

いや……喜界島さん、彼の話に納得したのかどうかは分からないけど100円ショップだとお金も門前払いどころか門前にすら来ないと思うよ？

それにお金の好きな人って大半は悪いイメージしかねーよ！

「ああ、金の好きな奴に悪い奴はいないさ。
嘘をついたことのない俺が保証しよう。

俺も職業上金がなければ生きていけないからな」

「なんの仕事をなされているんですか？」

「ああ、俺の仕事は金さえ貰えればどんな依頼でもこなす何でも屋
みたいなことだ」

喜界島さんの問いかけに対して彼は表情を変えず、躊躇せず、躊躇
いもせずそう答える。

それが嘘偽りのない事実であることを疑わせないような仕草で。

「へえー……なんだかっこいいですね！

どうしてそんな仕事をしているんですか？」

「答えが知りたいか。なら金を出せ。」

こんな些細な質問に対してまで“依頼”として金を要求する彼に対
して

「じゃあいいです。」

とあっさり引き下がるみんな大好きお金大好き喜界島さんであった。

「そうか、じゃあ俺はでかい依頼の最中なのでここで失礼させても
らうとしようか」

『あ！待ってください。僕から質問いいですか？』

ハイハイ！と手を上げて彼に問いかける。

「だからさつきも言っただろう。答えて欲しければ金を出せ。」

『いや、お金ならもう出してないじゃないですか。』

なんで悪い人ではなくて嘘を吐いたこともない何でも屋が依頼もしてないのに喜界島さんのお金を持っているんですか？』

そう言い終わる前に彼のズボンの右側を螺で引き裂く。

その右ポケットから2枚の1000円札がハラリと落ちてきたのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592z/>

負物語

2012年1月15日04時49分発行